

上海のカリキュラム改革におけるカリキュラム全体構造の特徴に関する研究

野 澤 有 希*

(令和元年8月30日受付；令和元年12月19日受理)

要 旨

本研究の目的は中国の新しい資質・能力すなわち「核心素養」への転換という背景の下で、上海カリキュラム改革の内容を考察する上で、カリキュラムの全体構造の特徴を明らかにすることである。PISAにおいて、上海は2009年、2012年の結果で連続首位の好成績を取めた。上海の教育改革は世界各国から広く注目されるようになった。他を大きく引き離してトップになった理由としては活用力を重視のカリキュラムの下で、生徒の思考力、活用力を高める授業がどの教科、どの学年でも日常的に行われているからである。本研究の結論として、以下の三点をまとめられる。

第一に、本研究は中国の二つの教育理念すなわち素質教育と核心素養の資質・能力の内容を明らかにした上で、素質教育から核心素養への転換過程を考察した。第二に、上海のカリキュラム改革は中国の素質教育の提唱より10年も早く受験教育を排し、資質・能力の育成を目指して取り組んでいたことが明らかになった。上海の第1期上海カリキュラム改革の中で、素質教育を実現するための教育目標を設定し、カリキュラムの全体構造として、「必修カリキュラム」「選択カリキュラム」「活動カリキュラム」から構成されている。上海の総合、選択カリキュラムと活動カリキュラムの実践経験は、全国の第8回カリキュラム改革に大きな示唆を与えた。第三には、本論は上海第2期カリキュラム改革の三つのカリキュラムの類型すなわち「基礎型カリキュラム」「発展型カリキュラム」「探究型カリキュラム」を考察したうえで、その関係性を明確にした。

KEY WORDS

School-Based Curriculum Development 校本課程開発
Shang Hai curriculum reforms 上海カリキュラム改革

curriculum Integration カリキュラム統合
curriculum model カリキュラム類型

1 はじめに

本研究の目的は中国の新しい資質・能力すなわち「核心素養」への転換という背景の下で、上海カリキュラム改革の内容を考察する上で、カリキュラムの全体構造の特徴を明らかにすることである。

グローバル化、第三次AIブームに伴い、世界の各国は、未来社会の新しい人材を育成するために資質・能力を明確に打ち出している。育成すべき資質・能力は国レベルの教育理念と学校レベルの教育目標、カリキュラムと教育方法、授業を連結し、教育目的を実現するために不可欠な主軸である。また、教育評価システムの構築とアカウントビリティを問うための重要な依拠である。世界各国は資質・能力に基づき、カリキュラム政策を打ち出している状況の下で、経済協力機構OECDの国際学習到達度調査PISA (Programme for International Student Assessment) 調査で好成績を挙げた上海、香港、韓国、シンガポールなどのアジアの国でも価値と人間性を重視しながら、カリキュラム改革を進めている。このような動向に先行した上海は新しい資質・能力を育成するためにアジアでいち早くカリキュラムの多様化を進めている。上海は80年代の末から中国の教育部の委託を受けて、大陸の他の地域に先立って小中高等学校のカリキュラム改革を行った。1988年から1997年の第1期カリキュラム改革の中で、「素質を高め、個性を伸長させる」という教育目標を設定した。カリキュラムの全体構造として、「必修カリキュラム」「選択カリキュラム」「活動カリキュラム」から構成されている。また、1998年から現在まで第2期カリキュラム改革の中では、学校に基礎を置いたカリキュラム開発すなわち校本課程¹⁾を重視し、学校の実態に相応するカリキュラムを編成することを推し進めた。特に、全人教育を中心に機能的カリキュラムを柱として「多様化されたカリキュラム構造」を定着するようになった。具体的には、基礎型カリキュラム、発展型カリキュラム、探究型カリキュラムが含まれる。このカリキュラムを多様化した全体構造改革と実践は新しい資質・能力に対応しており、成果を挙げている。

上海はいままで中国の経済発展の牽引役だけではなく、2012年1月中国の国家発展改革委員会は『第12次5カ年規

*学校教育学系

画期間における上海の国際金融センター建設計画⁽¹⁾を公表し、2020年を目処に国際運輸と国際金融センターの確立が進められている。この経済発達を支えているのはグローバル人材である。周知のように、PISAにおいて、上海は2009年、2012年の結果で連続首位の好成績を取めた。上海の教育改革は世界各国から広く注目されるようになった。他を大きく引き離してトップになった決定的な要因はどこにあるか。上海の教育改革の成功の理由としては、「1、中国では2001年に発令された『基礎教育課程改革』で知識伝授型授業から学習者主体の授業へ転換したが、上海では1990年代から実験的に学習者主体の授業への転換が始まり、すでに定着している。2、『基礎教育課程改革』によって、児童生徒による探究型の学習活動が増えている。3、学習者主体の授業を進めるために、小中高の教員が新しい教育方法についての実践研究を重ねている。4、一人っ子政策をなされているので、子供の教育に対する保護者の関心が高く、また、子供たちも保護者の期待に応えようとよく勉強している」である⁽²⁾。また、新潟県教育総合研究センターは好成績の要因を探るために上海で調査を行って、決定的な要因は「学校での授業水準の高さ、均質性である。活用力を重視のカリキュラムの下で、生徒の思考力、活用力を高める授業がどの教科、どの学年でも日常的に行われている。」⁽³⁾からである。上海のカリキュラムの全体構造は応用力と知識の活用能力を育てることを中心に学校教育の柱であるカリキュラムが設計されている。我々は上海のカリキュラム改革が大きな成果を上げたことには否めない。

日本では上海のカリキュラムの全体構造改革の先行研究が皆無である。現在、日本は新しい資質・能力を打ち出し、目標を達成するためにカリキュラム全体構造とカリキュラムの多様化の改革が欠かせない。上海はすでに中国の教育改革の先進的な実践地域として、資質・能力を育成するためにカリキュラムの多様化の実践を行って、経験を蓄積し続けている。PISA調査の結果からも分かるように、応用力と知識の活用能力を育成することを目的にした上海のカリキュラム改革は確実に「応試教育」からの脱却を実現し、また、日々進化を遂げている。その改革は日本にも示唆することが多いだろう。そこで、本論は中国の育成すべき資質・能力「素質教育」と「核心素養」の内容を概観してから、上海のカリキュラム改革を考察し、そのカリキュラムの全体構造の設計図を明確に描くことを目的にする。

2 素質教育から「核心素養」への転換

日本では2016年の「次期学習指導要領等へ向けたこれまでの審議のまとめ」において、新しい資質・能力の内容が打ち出された⁽⁴⁾。翌年、新しい学習指導要領において、資質・能力の三つの柱を今後すべての学校のカリキュラムの中で明確すべきという方針が告示された⁽⁵⁾。国レベル、学校レベル、教室レベルどのレベルでもカリキュラム開発する際、最初に資質・能力を明確にしたうえで、計画、実施、評価を行うことが必要条件になる。つまり、カリキュラムをデザインする前に、どんな資質・能力を育成するかを明確にしなければならない。どんな人材を育成するかを明確にすることはカリキュラム改革の最初の重要課題であり、カリキュラムデザインの出発点と目標である。資質、能力を明確に抽出した後、その目標に応じて適切なカリキュラムデザイン、実施、評価を意思決定できる。したがって、育成すべき資質・能力がカリキュラム改革の核心理念であり、デザインの主軸である。上海の第1期のカリキュラム改革の理念は「素質を高め、個性を伸長させる」とし、正しい精神素養、文化素質、身体素質、労働素質を育成できる全人的な発展を目指した。第2期の理念は「児童生徒を中心に」とし、正しい人生観、価値観、世界観、創造性と実践力を持つ人材を育成することである。したがって、本論は上海のカリキュラムの全体構造を解明する前に、資質・能力に関する「素質教育」から「核心素養」への転換の内容を明らかにする必要がある。

中国教育部は、「応試教育（受験教育）」すなわち、詰め込み教育の弊害を是正するために、1993年2月に『中国教育改革と発展綱要』が公布され、1995年3月に「中華人民共和国教育法」が改正され、素質教育への教育方針が転換された。同教育法の第1条では素質教育とは、「自然的な要素と社会的な要素という二つの要素を含んだ人間自身が成長していく過程において形成される一連の素養の総称である」、これを「道徳、科学文化素養、身体素養、心理素養の四つから構成されているため、この四つの側面バランスよく発達させるのが素質教育である」⁽⁶⁾と記されている。また、1999年に中共中央国務院が『教育改革の深化と全面的に素質教育の推進に関する決定』⁽⁷⁾を公布し、全国で素質教育が推進されるようになった。素質教育は、受験教育を排し、児童生徒の学習態度、創造性や実践力を含む能力を重視し、「徳」「智」「体」を調和的に育成することである。「受験教育から素質教育への転換は教材本位から人間本位への転換であり、教育の失敗から成功への転換である。また、時代の潮流であり、中国の教育現代化の最終目標：民族の道徳と文化の素質を高めることを実現するためである」⁽⁸⁾。

2001年に、中国の教育部は、『基礎教育カリキュラム改革綱要（試行）』を公布し、素質教育を推進するために第8回のカリキュラム改革を行い、カリキュラムの目標、構造、内容、実施、評価などの各側面から新しい教育システム

を構築し、中央集権の国家レベルカリキュラムの単一的な形式を是正し、国家、地方、学校という三つのレベルのカリキュラムからなる組織体制が整備された。カリキュラムの機能を強化し、国レベルのカリキュラム以外に、地域、学校が対応できるようなカリキュラム開発に力を注いだ。第8回カリキュラム改革の目標としては、詰め込み教育を是正し、児童生徒は、基礎・基本的な知識・技能を身につけると同時に、主体的な学習態度、学習方法を学び、正しい価値観を形成することである。新しいカリキュラムの構造としては、教科中心主義を是正し、児童生徒のニーズと発達段階に応じて総合カリキュラムを新設し、小中一貫教育を重視する。全体的にカリキュラム構造のバランス、統合性、選択性を重視し、改革を行うことになる⁽⁹⁾。

教育部は人材が激変した社会に対応できるように素質教育の内容をさらに具体化させるために、2014年に教育部は『教育課程改革の深化と道徳を重視する人材育成に関する意見』を告示し、各学習段階の児童生徒の核心素養の内容を明確にする教育システムを構築した。これは国が生涯学習と社会発展に応じて資質・能力を明確にするために初めて核心素養の育成方針を提唱した⁽¹⁰⁾。その後、中国教育部が2016年に公布した『中国における児童生徒の核心素養の発展』において、核心素養の内容が確立された。林崇徳（2017）は、核心素養を「児童生徒が人生や社会の変化に対応できるように必要とする人間性と能力」と定義し、その特徴は「知識基盤社会とグローバル化社会に対応できるうえで、中国の伝統文化も受け継げる能力」と述べている⁽¹¹⁾。鍾啓泉によれば、核心素養とは、「児童生徒が探究学習や協同学習を通して問題解決能力を育成することである。このような学習を通して児童生徒は自ら問題を発見する能力、観察、実験、調査で問題解決するには必要な情報を収集する、問題を解決する能力を育成する」と述べた⁽¹²⁾。

新しい資質・能力の内容すなわち核心素養を明確にする経緯としては、教育部が北京師範大学研究グループに核心素養の内容の研究を委託した。この研究グループは教育部の方針に基づき、世界の10か国と台湾、香港のカリキュラム改革と主要な資質・能力を考察した後、中国の伝統文化を分析し、32項目に及ぶ核心素養の内容を絞って、その内容に対して広範的に社会の各業界でインタビュー調査、アンケート調査を行った⁽²⁾。

表1. 核心素養の内容

側面	項目	基本的な要素
文化基礎	基礎教養・文化的素養	人文教養
		ヒューマニズム
		美的感性
	科学的精神	ロジカルシンキング
		クリティカルシンキング
		探究力
自主発展	学習方法を学ぶ	学びの態度
		自省心
		情報活用能力
	健康な生活	いのちを尊ぶ心
		人格形成
		自立心
社会参与	責任感	社会責任
		ナショナルアイデンティティー
		国際理解
	実践力・創造力	勤労
		問題解決
		技術の応用力

中国教育部が公布した『中国における児童生徒の核心素養の発展』（2016）を基に筆者作成⁽¹³⁾

「核心素養の内容を明確に打ち出すことは世界の潮流であり、中国教育の質を高め、国際競争力を上げるために必要不可欠です。また、核心素養の育成は目標、プロセス、教育方法、教育評価と一体化させ、教育実践を通して実現するものである。さらに、各学習段階のカリキュラム改革の全体構造の主軸である」⁽¹⁴⁾。「核心素養」は、表1で示したように、児童生徒の全人発展を目指して、「文化基礎（基礎教養・文化的素養、科学的精神）」、「自主発展（学習方法を学ぶ、健康な生活）」、「社会参与（責任感、実践力・創造力）」という三つの側面が含まれる。全人教育の目標を達成するために、核心素養の三つの側面バランスよく育成することが重要である。また、この三つの側面には、6の

項目と18の基本的な要素が含まれている。基礎教養・文化的素養には人文教養、ヒューマニズム、美的感性が含まれる。科学的精神にはロジカルシンキング、クリティカルシンキング、探究力が含まれる。学習方法を学ぶには学びの態度、自省心、情報活用能力が含まれる。健康な生活には、いのちを尊ぶ心、人格形成、自立心が含まれる。責任感には社会責任、ナショナルアイデンティティー、国際理解が含まれる。実践力・創造力には勤労、問題解決、技術の応用力が含まれる。

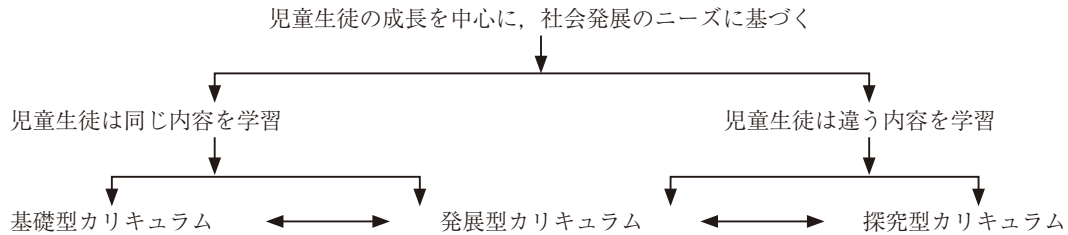
3 上海のカリキュラムの全体構造の改革

3. 1 カリキュラムの全体構造

林崇徳（2016）は、核心素養の内容が確立された後、教育実践の中で核心素養を育成するには、以下の三つの側面が重要であると指摘した。具体的には、一つ目は「カリキュラム改革」である。二つ目は「授業実践」である。教師の専門性を高め、授業活動を改善することを通して、児童生徒の核心素養を育成する。三つ目は「教育評価」である。核心素養育成のために、各学年・教科の教育評価の基準を明確にする必要がある⁽¹⁵⁾。上海は三つの側面ともにカリキュラム改革を実施しているが、本論は一つ目のカリキュラムの構造改革に焦点を当てて考察する。上海のカリキュラム改革は国の素質教育の提唱より10年も早く資質・能力の育成を目指して取り組んでいる。その背景として、1988年3月に中国教育部は上海の教育委員会に全国の経済発達地域で利用できる小中一貫教育の教材を作成することを委託したことをきっかけに、上海はその年から「社会の需要、教科の系統性、児童生徒の発展の原則に基づき、素質教育を核心とする」という理念で全国の教育改革をリードする立場で、カリキュラム改革を行った⁽¹⁶⁾。また、児童生徒の知識・技能、資質・能力、価値観のバランスよい人材を育成することを目的にした。具体的には、上海は中国教育部の委託を受けて、小中高等学校のカリキュラム改革をはじめ、大陸の他の地域と違うカリキュラム実施基準（学習指導要領に当たる）を制定した。1988年から1997年の第1期カリキュラム改革の中で、素質教育を実現するための教育目標を設定し、「必修カリキュラム」「選択カリキュラム」「活動カリキュラム」から構成されているカリキュラムの全体構造をデザインした。学校にカリキュラムの裁量権を委譲し、選択、統合、活動カリキュラムという校本課程を重視する。また、個性、才能教育を重視し、単一の教科形式を打破した。上海の総合カリキュラム、選択カリキュラム、および活動カリキュラムの実践経験は、全国の第8回カリキュラム改革に大きな示唆を与えた。2001年に、中国教育部は『基礎教育課程改革綱要』を告示し、小学校は総合教科を主とし、総合実践活動（総合的な学習の時間に当たる）が推進された。また、中学校は教科と総合教科を関連付けて、選択教科、選択総合教科、総合実践活動に力を入れた。さらに、高等学校は教科を主とし、必修教科以外に教科の選択性を多様化させ、単位制管理を推進した⁽¹⁷⁾。

1998年からの第2期上海カリキュラム改革の中では、継続的に学校に基礎を置いたカリキュラム開発すなわち校本課程を重視し、学校の実態に相応するカリキュラムを編成することが推し進められた。第2期カリキュラム改革の重点は児童生徒の創造性と実践力を育成するためにカリキュラムの全体構造改革、道德教育、情報技術教育である。また、上海教育委員会は各教科と領域の『教育指導綱要』と『教育課程基準』を告示し、新しい教材を作成した⁽¹⁸⁾。

特に、上海は全人教育を目指して新しい資質・能力を育成するために「多次元のカリキュラム構造」というカリキュラムの類型を定着させた。多次元カリキュラムとは、基礎型カリキュラム、発展型カリキュラム、探究型カリキュラムが含まれる。現在、新しいカリキュラムの全体構造が各小中高等学校で浸透されている。三つのカリキュラムの類型は上海のカリキュラム改革の核心内容であり、柱である。図1で示したように基礎型カリキュラムは、児童生徒の基礎・基本的な知識、資質・能力、学習態度を育成することを重視するカリキュラムである。発展型カリキュラムは学校の特色に応じて児童生徒の潜在能力を開発し、個性の伸長、興味、関心を高めるために、児童生徒が異なる学習内容を選択できるカリキュラムである。探究型カリキュラムは児童生徒が探究の方法を用いて、問題を発見し、解決するカリキュラムであり、児童生徒の自主性と創造性、探究力と実践力、協調性を育成する。探究型カリキュラムは二つの類型が含まれる。一つ目は授業の時間を弾力化させ、授業と授業外の時間と空間、内容を統合するカリキュラムである。二つ目は基礎型カリキュラムと発展型カリキュラムで学習した知識と技能を探究的な学習活動で創造力と活用力を育成することを目的としている⁽¹⁹⁾。上海のカリキュラムの全体構造は今までと違う新しい多層的な構造になり、多次元のカリキュラムになっている。上海のカリキュラム改革は「教科本位過ぎるカリキュラム、科目数が多いことに留意せず総合性に欠ける現状、9年一貫のカリキュラム部門と時間配分について、それに見合った時間変更をし、総合科目を設置し、地域によって異なる生徒の成長の要求に合わせて、課程構造の均衡性、総合性、選択性を生み出す」⁽²⁰⁾。このように、上海の知識や技能の応用力を伸ばすカリキュラムが30年前から継続して、実施されていることが連続トップの要因の一つだと考えられる。

図1. 上海のカリキュラムの類型⁽²¹⁾

上海の第2期カリキュラム改革において三つの種類のカリキュラムと八つの学習領域（国語と文学、数学、自然科学、社会科学、技術、芸術、体育と健康、総合実践）から構成されている。各学習領域の内容は表2で示した通りである。そのカリキュラムの全体構造は選択性、実践性、統合性をもっている。自然、社会、芸術という三つの学習領域は教科分離型と教科統合型のカリキュラムが相互作用をし、資質・能力を育成する教育目標を達成することを目的にしている。例えば、社会科学学習領域では統合カリキュラムは道徳と社会（1学年から5学年まで）、社会（9学年と12学年まで）であり、単一教科分離型カリキュラムは歴史、地理（2教科ともに6学年から8学年、10学年から11学年）である。自然科学学習領域では、統合カリキュラムは自然、科学技術（1学年から5学年）、科学（6学年から12学年）であり、分離型カリキュラムは物理、化学、生命科学（3教科ともに8学年から11学年）である⁽²²⁾。カリキュラムの類型は基礎型カリキュラム、発展型カリキュラム、探究型カリキュラムに分類されているが、校本課程は発展型カリキュラムと探究型カリキュラムを中心に開発される。上海カリキュラムの内容の組織形態は教科分離と統合の形がある。また、実施は教科以外に、活動を重視する。履修方法は必修と選択二種類が含まれる⁽²³⁾。

表2. 上海の八つの学習領域と内容

学習領域名	学習内容
国語と文学学習領域	国語、外国語
数学学習領域	数学
自然科学学習領域	小学校自然、中学校科学、科学、生命科学、地理等
社会科学学習領域	小学校道徳と社会、地理、歴史、思想政治、中学校社会等
技術学習領域	情報技術、労働技術
芸術学習領域	音楽、美術、芸術
体育と健康学習領域	体育と健康
総合実践学習領域	社会实践、地域サービス等実践活動

筆者は「上海市小学校課程計画（2017年）」の内容により作成した⁽²⁴⁾。

3. 2 「基礎型カリキュラム」「発展型カリキュラム」「探究型カリキュラム」の特徴

筆者は上海市の三つのカリキュラムの類型、基礎型カリキュラム、発展型カリキュラム、探究型カリキュラムについて、その内容と特徴を考察した。これから、上海の小学校の時間割と内容に焦点をあてて、特に発展型カリキュラムと探究型カリキュラムの内容の関連性を明確にしたい。

基礎型カリキュラムは新しい資質・能力、価値観を重視しながら、基礎・基本的な知識・技能、基礎的な学力を身につけ、今までの教師による知識伝達の形式を主とする。発展型カリキュラムは基礎型カリキュラムの上に、カリキュラムを多様化させた類型である。発展型カリキュラムは学校の特色を生かした校本課程であり、児童生徒が自主的に選択できるカリキュラムである。児童生徒の幅広い知識の習得、ノーマルに資質・能力、生涯学習、学習方法、学習態度を育成する。また、児童生徒の才能に着目し、個性を尊重し、生涯学習のために基礎的な能力、創造性を育成する。特に高次的な資質・能力、潜在的な才能、知識と技能、方法論、情意の側面と価値観、向上心、困難を打ち勝つ力、学習方法を重視する⁽²⁵⁾。探究型カリキュラムは、基礎型カリキュラムと発展型カリキュラムの上に、知識と能力を活用する能力を育成する。探究型カリキュラムは専門的と実践的なテーマを設定し、児童生徒の探究力を育成するために開発するカリキュラムである。特に、専門性、総合性、探究性を重視し、児童生徒の創造性、知識の概念化と創造、ロジカルシンキング、新しい知と方法の創出できる探究型人材の育成を目標としている。発展型カリキュラムは児童生徒の実践力、応用力を育成するために教師が（時間数、実施時期、内容を設定する）社会、学校、個人

の状況、ニーズに基づき、意図的に編成するカリキュラムに対して、探究型カリキュラムは学習の自主性を重視する。学習内容、学習方法、学習形態に関して児童生徒が主体的に決定する。教師は指導者であるが、役割として学習の支援側になり、個々の児童生徒の考え、アイデアに基づき、助言する。探究型カリキュラムは小学校ではテーマを設定し、探究活動を行い、中学校と高等学校は課題研究を主とする⁽²⁶⁾。

表3. 小学校の三つのカリキュラムタイプの週時間数

教科／授業時間数／学年	一	二	三	四	五
国語	9	9	6	6	6
数学	3	4	4	5	5
外国語	2	2	4	5	5
自然	2	2	2	2	2
道徳と法律 道徳と社会	2	2	2	3	3
音楽	2	2	2	2	2
美術	2	2	2	1	1
体育と健康	3	3	3	3	3
情報科学技術			2		
労働技術				1	1
週基礎型授業時間数	25	26	27	28	28
趣味活動（スポーツを含む）	5	4	4	4	4
テーマ学習、クラスあるいは団体活動	1	1	1	1	1
社会サービス、社会実践	年1－2週	年1－2週	年2週	年2週	年2週
探究型カリキュラム	1	1	1	1	1
週発展型と探究型授業時間数	32	32	33	34	34

筆者は「上海市小学校課程計画（2017年）」により作成した⁽²⁷⁾。

表3は2017年に上海教育委員会が発表した上海の小学校のカリキュラム計画である。この表で示したように基礎型カリキュラムは必修カリキュラムであり、国語、数学、外国語、自然、道徳と法律および道徳と社会、音楽、美術、体育と健康、情報科学技術が含まれて、週授業時間は1学年25単位授業時間（35分）、2学年は26単位授業時間、3学年は27単位授業時間、4、5学年は28単位授業時間である。発展型カリキュラムは選択可能な趣味活動（スポーツを含む）、テーマ学習とクラスあるいは団体活動が含まれ、また、社会サービス、社会実践活動として年間1～2週を実施することになる。探究型カリキュラムは必修カリキュラムであり、毎週1単位授業時間を占める。筆者は上海のX区の九つの小学校のカリキュラムデザインを考察した結果、発展型カリキュラムと探究型カリキュラムには融合タイプと分離タイプが含まれ、融合型が多数を占める。探究型カリキュラムと発展型カリキュラムと分離されている小学校は三校があり、それぞれの探究型カリキュラムの内容は国際理解、橋の歴史と設計、生活実験とアイデアである。六校の小学校は特に具体的な探究型カリキュラムを設置せず、発展型カリキュラムの中に内包されている形をとっている。融合型の発展カリキュラムの内容としては以下通りである⁽²⁸⁾。

- D校：スポーツ、英語、数学、興味探し
- E校：人文、芸術、科学創造、運動と心理、社会生活
- F校：健康、世界探索、芸術、創造空間
- G校：科学と物理、人文、体育と芸術
- H校：体育、人文、科学、芸術
- I校：読書、数学、体育、英語、科学技術

また、筆者は分離タイプのB小学校の発展型カリキュラムの時間数と履修形態を考察した。発展型カリキュラムは科学技術と文化芸術（週3単位時間・自由選択）、体育健康（週2単位時間・自由選択）、学年のテーマ学習（週1単位時間・必修）、学年の社会と地域の実践活動（各学年1～2週・必修）がある。具体的には、科学技術にはロボッ

ト、飛行機模型、パソコンが含まれ、文化芸術には、ピアノ、弦楽器、民族楽器、ダンス、絵画、管楽、合唱、文学が含まれる。体育健康には、囲碁、ブリッジトランプゲーム、バスケットボール、サッカーが含まれる。このように、中国の上海各学校ではカリキュラムの多様化を図るために自由選択できるカリキュラムを開発している。また、カリキュラムの統合性、活動主義を重視し、探究を中心に児童生徒の資質・能力を育成している。発展型カリキュラムと探究型カリキュラムは各学校の特色を生かした学校に基礎を置いたカリキュラムともいえるだろう。現在、中国の他の地域でも校本課程すなわちSBCD (School-Based Curriculum Development) に力を入れて、多様なカリキュラムの類型を利用し、新しい資質・能力の育成を図っている。

4 結論

本論は中国の素質教育から核心素養への転換の内容を明確にしたうえで、上海のカリキュラム改革を考察した。資質・能力を明確にしてから、我々はどうのように資質・能力を育成するかという問題を解決しなければならない。先ず、資質・能力を育成するためにカリキュラムの全体構造をデザインすることが重要である。なぜなら、カリキュラムデザインは個々の児童生徒に資質・能力、経験を内面化させるために教室と授業を連結させるツールであり、必要不可欠な学びの地図だからである。筆者は80年代末からの上海のカリキュラム改革を概観してから、カリキュラムの全体構造の特徴に焦点をあてて考察を行った。とくに、基礎型カリキュラム、発展型カリキュラム、探究型カリキュラムの内容と相互の関係性を明らかにした。これから、本研究の結論として、日本に示唆できることを含めて、以下の三点をまとめる。

第一に、本研究は中国の二つの教育理念すなわち素質教育と核心素養の資質・能力の内容を明らかにした上で、素質教育から核心素養への転換過程を考察した。中国教育部は、「応試教育（受験教育）」すなわち、詰め込み教育の弊害を是正するために、1993年2月に『中国教育改革と発展綱要』が公布され、1995年3月に「中華人民共和国教育法」が改正され、素質教育への教育方針が転換された。その後、中国教育部は2001年第8回カリキュラム改革において素質教育を提唱し、全国のカリキュラム改革を行った。素質教育は、受験教育を排し、児童生徒の学習態度、創造性や実践力を含む能力を重視し、「徳」「智」「体」を調和的に育成するためである。また、教育部は人材が激変した社会に対応できるように素質教育の内容をさらに具体化させるために、2014年に『教育課程改革の深化と道徳を重視する人材育成に関する意見』を告示し、生涯学習と社会発展に応じて初めて核心素養の育成方針を提唱した。その後、中国教育部が2016年に公布した『中国における児童生徒の核心素養の発展』において、核心素養の内容が確立された。「核心素養」は、児童生徒の全人発展を目指して、「文化基礎（基礎教養・文化的素養、科学的精神）」、「自主発展（学習方法を学ぶ、健康な生活）」、「社会参与（責任感、実践力・創造力）」という三つの側面が含まれ、6の項目と18の基本的な要素が含まれている。本研究は日本の先行研究で解明できなかった中国の核心素養の内容は明確にした。日本では「生きる力」を具現化するために、新しい資質・能力の三つの柱（個別の知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性）を提唱したが、三つの柱の内容をより具体化していく必要がある。

第二に、上海のカリキュラム改革は中国の素質教育の提唱より10年も早く80年代末から受験教育を排し、資質・能力の育成を目指して取り組んでいたことが明らかになった。上海の1988年から1997年の第1期カリキュラム改革の中で、素質教育を実現するために、「必修カリキュラム」「選択カリキュラム」「活動カリキュラム」から構成されている新しいカリキュラムの全体構造を構築した。上海の総合カリキュラム、選択カリキュラムと活動カリキュラムの実践経験は、全国の第8回カリキュラム改革に大きな示唆を与えた。その背景として、1988年に中国教育部は上海の教育委員会に全国の経済発達地域で利用できる小中一貫教育の教材を作成することを委託したことをきっかけに、上海はその年から「社会の需要、教科の系統性、児童生徒の発展の原則に基づき、素質教育を核心とする」という理念で全国の教育改革をリードする立場で、カリキュラム改革を行った。この点について、日本の先行研究の中で今まで解明できなかった。中国全土の2001年後のカリキュラム改革はその影響で、小中学校は総合教科を主とし、総合実践活動（総合的な学習の時間に当たる）が推進された。

第三には、本論は上海の三つのカリキュラムの類型を考察したうえで、その関係性を明確にした。第2期上海カリキュラム改革の中では、継続的に学校に基礎を置いたカリキュラム開発すなわち校本課程を重視し、学校の実態に相応するカリキュラムを編成することが推し進められた。上海教育委員会は全人教育を目指して新しい資質・能力を育成するために基礎型カリキュラム、発展型カリキュラム、探究型カリキュラムが含まれる「多次元のカリキュラム構造」というカリキュラムの類型を定着させた。基礎型カリキュラムは、児童生徒の基礎・基本的な知識、資質・能力、学習態度を育成することを重視するカリキュラムである。発展型カリキュラムは学校の特色に応じて児童生徒の潜在能力を開発し、個性の伸長、興味、関心を高めるために、児童生徒が異なる学習内容を選択できるカリキュラム

である。探究型カリキュラムは児童生徒が探究の方法を用いて、問題を発見し、解決するカリキュラムであり、児童生徒の自主性と創造性、探究力と実践力、協調性を育成する。上海の知識や技能の応用力を伸ばすカリキュラムが30年前から継続し、実施されていることがPISA調査連続トップの要因の一つだと考えられる。基礎型カリキュラム、発展型カリキュラム、および探究型カリキュラムは相互補充、深化、往還の形になり、児童生徒の新しい資質・能力を育成している。特に、発展型カリキュラムは個人のニーズに応じて、カリキュラムの多様化を実現させ、選択可能の幅を広げた。また、探究カリキュラムは発展型カリキュラムと統合した形をとる学校も多いことが分かった。探究型カリキュラムは児童生徒の学習の主体性を重視し、探究の方法を利用し、思考力、創造力等を育成することを重視している。

今後の研究課題としては、上海の三つのカリキュラムの類型、特に発展型カリキュラムと探究型カリキュラムはどのように児童生徒の深い学びにつなげたか、資質・能力を育成できるかを具体的な事例を挙げながら説明することである。

注：

- 1) 中国では「学校に基礎を置くカリキュラム開発」すなわちSBCD (School-Based Curriculum Development) を校本課程という。国の政策として正式に中国の基礎教育課程システムに導入されたのは第8回基礎教育課程改革、1999年6月に開催されて代3次全国教育会議で『中共中央国务院教育改革を全面推進するため素質教育に関する決定』が公表されてからである。中国全国で国家課程、地方課程、学校課程からなる新教育課程システムが発足した。
- 2) アンケート調査とインタビュー調査対象として、校長、教員、教育関係者、各領域の専門家、企業の責任者等608人が含まれる。

参考文献：

- (1) 中国国家発展改革委員会2012年1月『第12次5カ年計画期間における上海の国際金融センター建設計画』
- (2) 日本環境教育フォーラム <http://www.jeef.or.jp/child/201409tokusyu03/> (2019/8/20最終確認)
新潟教育総合研究センター 2012年『競争より支援学力トップ上海の教育』時事通信社
- (3) 新潟教育総合研究センター 2014年『PISA連続トップ教師の育つ上海の教育』時事通信社 P.11.
- (4) 中央教育審議会 2016年8月26日「次期学習指導要領等へ向けたこれまでの審議のまとめ」
- (5) 文部科学省 2017年『小学校学習指導要領』『中学校学習指導要領』
- (6) 中国教育青年年鑑 1994年『中国教育改革と発展綱要』, 人民教育出版社。
中国教育部 1995年3月に『中華人民共和国教育法』
- (7) 中共中央国务院 1999年『中共中央国务院教育改革的深化と全面的に素質教育の推進に関する決定』
<http://www.e4in1.com/index/cal2148.htm>
- (8) 鐘啓泉 1997年「新世紀の教育課題：教育中心の転換」『中国教育専門家展望21世紀』山西教育出版社 P.54.
- (9) 中国教育部 2001年6月『基礎教育カリキュラム改革綱要（試行）』をもとに筆者作成
<http://www.moe.edu.cn/edoas/website18/infol2843.htm>
- (10) 中国教育部2014年『教育課程改革の深化と道徳を重視する方針に関する意見』
http://www.moe.gov.cn/srcsite/A26/s7054/201404/t20140408_167226.html
- (11) 林崇徳 2017年「中国学生核心素養研究」,『心理与行為研究』15(2), PP.145-154.
- (12) 鐘啓泉 2016年「核心素養的習得養成」, 中国教育報, 2016-11-02.
- (13) 中国教育部 2016年『中国における児童生徒の核心素養の発展』
- (14) 林崇徳 2017年「中国の児童生徒核心素養に関する研究」『心理と行動研究』第15巻(2), P.145.
- (15) 林崇徳 2016年「中国学生发展核心素養：深入回答『立什么德, 树什么人』」,『人民教育』(19), PP.14-16.
- (16) 上海教育委員会 1988年『上海小中学校課程教材改革委員会の設計と計画』
- (17) 同上『教育課程改革の深化と道徳を重視する方針に関する意見』
- (18) 上海教育委員会 1999年『上海市小中学校課程教材改革第2期実施意見の通知』(第13号)
- (19) 上海教育委員会 1998年「上海市小中等学校課程方案（試案）」
- (20) 新潟教育総合研究センター 2014年『PISA連続トップ教師の育つ上海の教育』時事通信社 p.13.
- (21) 上海教育委員会 1998年「上海市小中等学校課程方案（試案）」により、筆者が作成した。
- (22) 王月芬 2016年6月2日「カリキュラム改革上海教育は量から質への変換」中国教育新聞ネット版
http://www.jyb.cn/theory/kcjsx/201606/t20160602_661594.html
- (23) 新潟教育総合研究センター 2014年『PISA連続トップ教師の育つ上海の教育』時事通信社 p.14.
- (24) 上海市教育委員会「上海市小学校課程計画（2017年）」

<http://www.shyp.gov.cn/shypq/jydd-ddfg/20181130/288267.html>

- (25) 上海教育委員会 1999年『上海市小中学校発展型カリキュラム指導綱要』
- (26) 上海教育委員会 1999年『上海市小中学校探究型カリキュラム指導綱要』
- (27) 前掲「上海市小学校課程計画（2017年）」
- (28) 筆者は上海の徐汇区の9つの小学校のカリキュラムグランドデザインにより作成した。

A research on implications of Shanghai Curriculum Reforms on the whole structure of the curriculum

Yuki NOZAWA*

ABSTRACT

This study aims at analyzing the holistic features of the curriculum structure after the Shanghai curriculum reform, with a background of a new round of curriculum reforms, shifting from quality education to core qualities.

Everyone knows around the world, in PISA investigations at 2009, 2012, Shanghai remained the first on the list. The success of Shanghai is the success in the application of knowledge in practice, emphasizing thinking and creative thinking in curriculum design. All these goals are reflected in classroom lessons. From 1988, Shanghai focused on goals of raising quality education, emphasizing education for individuality, encouraging school based curriculum development. Conclusions focus on three points:

First, the current study aims at detailed analysis of two educational concepts in China, quality education and core qualities in abilities, with some analysis on the transformational processes.

Second, the first stage of curriculum reform in Shanghai focused on the curriculum structure to ensure quality education, including compulsory curriculum, elective curriculum and activity curriculum. The integrated curriculum, elective curriculum, and activity curriculum has provided the 8th national curriculum with rich experience.

Third, this paper analyses three curriculum models in Shanghai, and their mutual relationship.

* School Education